

となり町戦争を讀んで

三〇一一年三月十一日、我が国日本で、東
日本大震災が起こった。テレビや新聞などの
メディアは、連日それを報じていた。津波が
町全体をさらい、流されていく家や船。福島
第一原発の三号機の水素爆発。火事のため辺
り一面が火の海と化した宮城県気仙沼。家族
や家を失い、さまよい、泣き叫ぶ人々。しか
し、これらを見ても私にはこれが本当に自分
の国で起きていることなのかわからなかった。
まるで異国のことのようにであつたし、また悪
い夢を見ているかのようだった。実際の出来
事とは到底思えなかつた。正確に言うとな、今
でも「あれは現実に起きたことなのだろうか。
そんな疑問が私の心の中にしこりとして残っ
ている。なぜあれから二年以上が経つた今で
も「突感」できないのだろうか。
この本の主人公はある日、地域の広報紙で
「となり町との戦争のお知らせ」を目にする。
そして、心の準備もできぬまま開戦の日を迎
えた。しかし、町はいつもと何ら変わりがない

い。人々は戦争のことを話題にしな
 争を始めたことすら知らないよう
 人公は次第に、今が戦時中である
 れがちになっ
 らない日常を迷
 者には人々の死が
 った。そんな
 況を確認して
 増えていく死
 私にはそれら

のか。その他
 主人公には
 残った。それ
 増えてい
 っ
 々が続いた。
 なった。震災
 況を確認して
 増えていく死
 私にはそれら

戦っているのか。どこで戦闘は行
 との間
 った。自分
 者には人々の死が
 った。そんな
 況を確認して
 増えていく死
 私にはそれら

なかつた。

そして、となり町との戦争は主人公が何一つ実感できないまま終戦を迎える。ではなぜ戦争を実感できなかったのか。その答えを導き出すヒントは町役場で働く香西さんの言葉にあつた。

「戦争の昔を、光を、気配を、感じ取、てください。」

主人公は大砲を撃つ音も、銃声も聞いていない。硝煙の臭いも嗅いでいない。戦争の痕

跡も見えていない。割れた窓、銃撃でえぐられ

た塀、焼失した家屋、そして戦死者の屍、血

痕も。だから主人公は戦争を「リアル」に感

じられなかつたのだらう。

そしてこれこそが、私に足りなかつたこと

だ。た。私は震災を「リアル」に体験しては

いなかつたのだ。た。震災が起きたあの日か

ら私の身の回りでは変わったことは全くと言

つていいほどなかつた。いつも通り、朝に起

床し、朝食を食べる。いつもと同じ風景の中

学校へ行く。授業を受けて、友達と話を
 帰宅し、塾へ行く。夜が更けて、柔らかな布
 団にもぐり込む。私は以前と全く同じ生活を
 送っていた。震災の音も、光も、傷ついた人
 々のうめき声も、何一つ感じ取ることなく過
 ごしてきたのだ。た。もしあの時、地響きや
 押し寄せる津波の轟音を聞いていたらどうだ
 っただろう。少しでも揺れを感じていたら。
 もしかすると、私は震災を現実起こしたこ
 ととして捉えることができたのかも。しれない。
 そして主人公は佐々木さんという女性の死
 を通して、初めて戦争をリアルに感じる
 のだ。佐々木さんは主人公を逃がすという目
 的のために死んでいった。だが、それを知
 たのは戦争が終わったからであつた。主人公
 は戦争を見ることはなかつたが、戦争に加わ
 った。意志を持って誰かを殺しはしなかつた
 が、佐々木さんという一つの命がなくなつた
 ことに自分が確実に関係していたことに悩む。
 それを一生知らなままに、無自覚に、イノ

セントに、生涯を終えたかもしれないと。かし、日常とはそんなもので、それを自覚しているかどうか、自分の目の前で起きているかどうか。それだけの違いなのではないかと主人公は考え始めるのだ。これを読んでいかに自分の体験というのが「突感」につながるかということかわかった。テレビで見たり、聞いたりすること。それだけでは実際の状況は完全には理解できない。私はこれまで過ごしてきた十六年間、たくさ

んのことを見落としてきたのかもかもしれない。だから、これからは見たり聞いたり、少しでも興味を持。たこと全てに積極的に関わり、行動し、体感していきたい。リアルこそそれが私たちを「突感」へと導いてくれるのだがかう。